

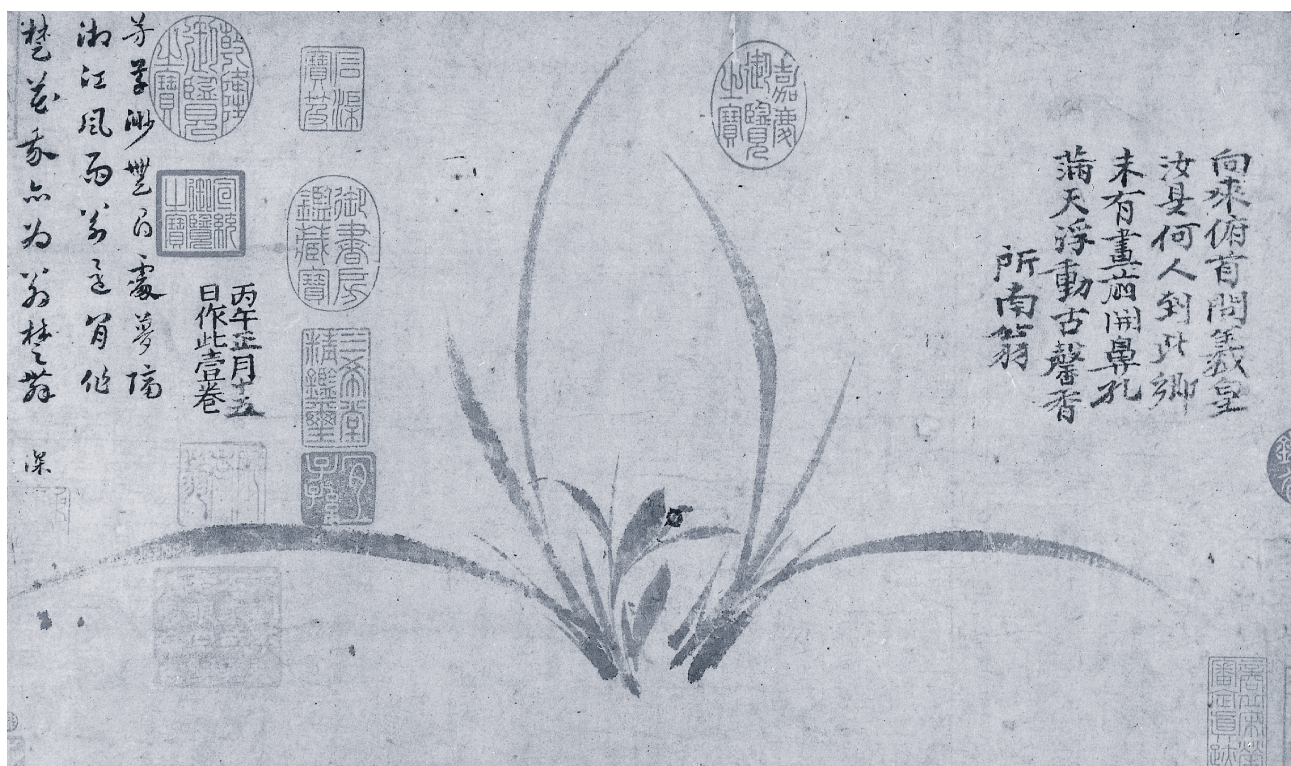
# 明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)  
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

第35回全国文献・情報センター  
長会議を終えて  
原 洋之介

インド・イスラーム建築史の魅力  
深見奈緒子

中国美術史におけるデジタル化の現況  
板倉聖哲



元・鄭思肖 (1241-1318) 「墨蘭図巻」(大阪市立美術館) 大徳10年 (1306)

南宋末元初の遺民の態度は様々だが、鄭思肖は元朝に対する抵抗の精神を堅持し続けた遺民を代表する人物。その名は宋の宗室である趙(宋)氏の旁をとって「宋宗室を思う」を意味し、宋への忠誠心を示している。彼が得意とした墨蘭は土や根が描かれなかった。露根や無根の蘭は、蛮人に奪い去られた国土を描くことを避けたためであるという。

# 第35回全国文献・情報センター長会議を終えて

原 洋之介

## 1.

1月28日の午後に、第35回の全国文献・情報センター長会議が山上会館で開催された。当番センター長として、会議開催の前までその成りゆきがいささか心配であった。しかし、結果として大層有意義な会議を開けたと思っている。中里センター主任ならびに佐々木業務掛長以下関係者の努力に、ここで謝意を表しておきたい。

会議は、文部省学術国際局学術情報課課長太田慎一氏の話からスタートした。それは、来賓挨拶という言葉が通常意味しているようなものではなかった。学術情報基盤の整備充実関係予算のきびしい現状について無駄のない説明を受けた。国の財政構造改革という大事業、それと関連して国立大学の行政法人化も政策アジェンダに乗るという状況のなかで、人文・社会系文献・情報の整備のための予算要求が大層困難な状況におかれていることを、素直に我々に伝えてくれた。更にそういう情勢下でも、人文社会系の文献・学術情報が日本学術研究の基盤であることをはっきりと認識され、その事を財政当局等に伝える努力をしてくれていることも、我々は確認しえた。来年1月はじめには、文部省と科学技術庁とが統合して新しく文部科学省が生れる。この省庁再編成のなかで、学術国際局ならびにその下にある学術情報課、研究機関課も改組される。このような制度変更のなかで、文献・情報センターと文部省との関係についても何らかの変更が予想されている。しかし、今回の報告ならびにそれに続く討論で、文部科学省下で改編される担当課とは密接な関係を維持できることが確認された。これは、大きな収穫であったといえる。

恒例により参加各センターの事業報告と将来計画についての報告があった。その後、今回のセンター長会議のいわば中心的課題として、センター長会議の将来構想について、有意義な意見交換をおこなうことが出来た。どのセンターも文献・情報関連の研究・サービスの技術的与件である厳しい情報技術革新に対応していかなければならないが、同時に厳しい財政およびマンパワーの面の制約に直面しているという共通の課題・悩みをかかえている

ことが明らかになった。

その設置の経過や業務内容からみて我がセンターと「最も近い」のが、京大人文科学研究の東洋学文献センターである。概算要求がほぼ通ったことで、この京大センターは本年4月以降漢字情報研究センターとして新しく出発する。高田センター主任の話によると、「単に日本の学界あるいは国外の学界に情報を発信するセンターということだけではなく、人文科学研究の研究活動の中核ないし紐帶的役割を果す方向」にセンターの活動を大きく編成させていく計画であるということであった。

もうひとつは、このセンター長会議そのものの役割であるが、一橋大経済研究所日本経済統計情報センターの寺西センター長ならびに神戸大学経済経営研究所経営分析文献センターの井川センター長が強く主張されたように、設置の理由やその後の事業の経過からみて「5センターは非常にユニークであり重要な組織なので、5センターとしてのまとまりを維持し、強化していく」ことが必要であることも、ほぼ参加者の間で合意された。

この会議に出席したセンターは相互の提携を強めるために、平成7年度より人文社会科学学術情報セミナーを開催している。本年度のセミナーでは、我がセンターからも3名の方に報告をしてもらい、他のセンターとの研究連結の可能性も次第に見えはじめてきている。今後はこのセミナーをもっと充実させ、かつ関連する研究機関を協力機関として積極的にとりくむ努力をすることも合意された。

## 2.

東洋学研究情報センターの活動をチャネルとして、他の研究機関との間に研究のネットワークをひろげる可能性は、次第に高まってきているようである。こう思っていた時、京大人文研の将来を考える討論会の記録に接した（『人文』第46号）。そこで、阪上孝氏は「桑原先生の時代なら、例えばルソーを読むのに、それぞれの人が論陣を持っていて、ひとつの対象をいろんな角度から攻めるといのが中心だった。けれども、これから要求されるのは、そういう学術的な研究だけでなく

て、共同研究から新しいディシプリンが出てくるようなものを目指す必要があるのではないか。」と発言されている。京大人文研といえは、専門分野が異なる研究者の共同研究のメッカであった。これに続けて籠谷直人氏が「1970年代の人文というのは、反マルクス主義を掲げてがんばっていたイメージがあった。しかし、ターゲットとしてのマルクス主義が弱体化し、人文のイメージも弱くなってしまったところがあるように思う」と発言されている。一時期マルクス主義者は、日本を含めた東洋を、アジア的生産様式一色にぬりつぶしヨーロッパ近代を頂点とする遠近法の遠景に沈めていた。日本の学界におけるこの事態を思い出すとき、籠谷氏の発言の前半は、まさにその通りであろう。そして、この時代の京大人文研の共同研究は、東大アカデミズムへの批判でもあった。

国際日本文化研究センターの川勝平太氏が、以下のような興味深い指摘をしている。西洋文明の変電所の役割をもち、後進日本に向かって近代化の基礎を説いて大衆を啓蒙してきた東大アカデミズムの進歩史観に対して、強力なアンチテーゼを提出してきたのが京都学派である。そこには、地域や空間への強いこだわりがある。東大アカデミズムも含めた近代西洋の知性が世界を歴史の形成、時間の形成において了解したのに対し、京都学派は、場所、生態、地域などの概念で世界を了解しようとする。まさに、世界観を構成する枠組みが根本的に相違しているのだ。そして戦後の京都学派には、ヨーロッパ学派がいう後進性ないし歪みからの解放というテーマが虚偽性にみちたものであるとする意識があるから、ある種の楽天主義がある（『文明の海洋史観』）と。

アジア地域のもつ文化の特性や歴史の個性を明らかにしようとするアジア研究は、西欧の起源の進歩主義を基調とする人文・社会科学的研究とは、どこかで異質なものにならざるをえない。まさに、京都学派はこのことをはっきりと認識していた。しかし、マルクス主義の歴史観が崩壊した欧米起源の近代化もほぼ終焉した現在、我が国の人文・社会科学の研究はどこに根拠をおくべきか、その主軸は未だ定まっていらない。籠谷氏の発言の後半

が端的に告白しているように、今我々は何を根拠に人文・社会科学の研究を進めていくべきなのであろうか。こういう大きな問題関心を背景として、「新しいディシプリン」を作り出す目的で、東洋文化研究所と人文科学研究所との間で何らかの研究提携がはかれぬものだろうか。

小淵首相が私的に組織した「21世紀日本の構想」懇談会は、その報告書のなかで以下のように書きしるしている。我が国は21世紀の世界を生きていくために、国内基盤をもっと充実させなければならない。そのためには、世界・地域研究などシンクタンクの創設・大幅な拡充が必要であると。アジア研究を核とした、各種研究機関のネットワーク化は、いよいよ急務なのである。

### 3.

国立大学の設置形態をめぐる議論のなかで、学問研究の説明責任accountabilityがきびしく問われはじめている。説明責任とは、資源がどのように使われ、その結果どのような結果が出たかについて、他者に報告し、説明し、正当なものであると納得させることである。そこでは、「誰が、何に関して、誰に対して、どのような方法で、どのような結論をもって説明する責任を負うのか」ということが強く問われてくる。

この説明責任をどうはたすかは、大学と社会との関係のあり様に応じて、多様な形がありえよう。しかし、大学と社会とを、市場関係（market nexus）とみるのか、あるいは相互信頼（trust）とみるのか（マーチン・トロウ、「高等教育における信託、市場、説明責任：比較的考察」『IDE：現代の高等教育』No.15 2000年2月）。このいずれかであるかが、学問研究の説明責任のあり様を基本的に決めることになる。

これまた川勝平太氏の言であるが、日本は、驚異的な経済発展をしたにもかかわらず、つくりあげた国富の姿が見苦しい。富とは、「巨大な商品の集積」であろう。それが若しその時々々の交換価値だけで評価されるとき、国富が見苦しいものになりかねない。市場では、流行にも影響された移り気な評価で交換

価値が決められることが多いからである。富は、単なる市場価値で集計・集積された量ではない。独自の使用価値をもつ様々な物の組み合わせられた複合体であり、その組み合わせの仕方が、社会の文化を決めることにもなるものだ。

21世紀は、情報ネットワーク社会になるといわれている。そういう社会のなかで、アジア理解のための基礎的研究情報とは、経済学的用語を用いれば、ある種のクラブ財であろう。その解読のための技法や意味解釈のため

のコードを共有しているメンバーの間で利用されまた再生産されていくという意味である。研究の発展という視点からはこのままでも良いが、研究と社会との相互信頼を高めるためには、研究情報をより一般的な公共財へ転換させざるをえない。そのために、我々は今何をすべきか。文献情報ないし研究情報センターだけでなく、人文社会系研究所自体も今この事を正面きって考えなければならないのだ。（センター長・東洋文化研究所長）

## インド・イスラーム 建築史の魅力

深見奈緒子

『明日の東洋学』No.2の表紙、そしてNo.1の6ページに、デリーの墓建築とミナレットの写真が掲載された。これらの写真は、40年前に東京大学インド史跡調査団によって撮影されたものである。同調査団の膨大な写真資料は、東洋文化研究所に眠っている。その概要は、白黒ネガフィルムでは4×5サイズ（12枚綴り）261本、6×9サイズ（8枚綴り）283本、6×6サイズ（12枚綴り）627本、35mmサイズ（36枚綴り）426本、加えてカラー・ポジ・フィルムは6500コマにおよぶ。中には記念写真や風物、風景、ヒンドゥーや仏教の遺跡も含まれるとはいえ、イスラーム建築を撮影したものだけ取り上げると20000枚あまりを数える。

インド史跡調査団の目的は、デリーに遡るサルタナット期（1525年以前）のイスラーム建築の悉皆調査であった。加えてベンガル、デカン、グジャラート等、地方の重要イスラーム建造物の調査がおこなわれた。この写真を建物別に整理すると、デリーでは500件を超え、地方では230件あまりを数え、総計750件近いインド・イスラーム建築の写真データを保有していることとなる。これらの写真資

料は、既に破壊された建築、手荒く改修された建築、都市化に取り込まれた建築等々の40年前の状況を知る貴重な資料である。また、大型カメラによる入念な撮影である点も見逃せない。現在、これらの写真資料を再整理し、公開に向けてデータ・ベース化の作業を行っている。ここでは、インド・イスラーム建築の持つ魅力、ひいては資料公開によって可能となるインド・イスラーム建築史研究の可能性についてまとめてみたい。

まず、インドの建築は頑丈で残りがよいという特性が研究にふさわしい。一例を引けば、調査団の報告書『デリー 第1巻 遺構総目録』には1198年から1525年までの385件の建築が収録されている。これをイランのイスファハーンの実態と比較してみよう。デリーの目録の対象範囲に対応する地域として、半径20kmあまりの広域の大イスファハーンを考えると、10世紀から1500年までをとらえたとしても、現存建築は50件に及ばない。石造建築である故にこれほど残りがよいと推察される向きもあろうが、同じく石造建築伝統を持つカイロと比較しても、アイユーブ朝期とマムルーク朝期（1171年から1517年まで）

あわせて245件と、デリーに軍配が上がる。

しかも単に事例が多いというだけではない。インドのイスラーム建築は、中央アジアやイランの建築から大きく影響を受けている。それゆえ、遺構の少ない同地の建築史を研究する場合には、インドの事例から類推することが可能となる。たとえば、セルジューク朝に端を発するといわれる2基一対のミナレットは、本家にその完全な遺構がなく、アジメールの実例が有力な手がかりとなる（写真1）。また、遺構が皆無に等しいティムール朝の宮殿建築を考察する際には、インドのマンドゥーやビーダルの15世紀の宮殿建築が大いに参考となるという具合である（写真2）。

次に、インド・イスラーム建築の一特質を捉えるために、『明日の東洋学』に掲載された2枚の写真に話を戻そう。No.1に収録された写真は、デリーにはじめてイスラーム政権が樹立されたときに、その支配の象徴として立てられた高さ70メートルにもおよぶ塔のバルコニー部分で、その裾部にはヒンドゥー寺院からの転用柱を用いたインド最古のモスクが建つ。そのモスクでは柱と梁の構造を覆い隠すかのように、礼拝室の前に、大きなアーチをくりぬいた分厚い壁が建つ。しかしながら、このアーチは部材がお互いに迫り持つという真のアーチではなく、水平材を持ち送り

状に重ねた擬似アーチ（写真1参照）である。一方、No.2の表紙は、それからほぼ120年後のスルタンの墓である。この建築は、インドの石材を用い、アーチの回転体といえる完全なドームを頂く。この100余年の間に、デリーのイスラーム建築は重要な転換を遂げた。すなわち、デリーでは、インド土着の梁柱構法から脱却し、イスラームがもたらしたアーチ構法へと移行するという方向を明らかにしたのである。とはいえ、インド各地のイスラーム建築はデリーと同じ道筋を辿ったわけではない。それぞれ豊かな地方色を持つ点がインド・イスラーム建築の面白さのひとつである。

12世紀末にデリーから始まったイスラーム支配は、インド各地へと拡がり、14世紀中頃には、各地でイスラーム地方王朝が成立する。各地で花開いたイスラーム建築は、14世紀末から15世紀半ばまでにはその方向性を顕著とする。ちなみに、時代を画するモニュメントをインド調査団の資料から紹介すれば、ベンガルのアディナ・マスジド（1374年、写真3）、デカンのジャーマ・マスジド（グルバルガ、1367年、写真4）、グジャラートのジャーマ・マスジド（アフマダーバード、1423年、写真5）、ガンジス川中流域のアタラ・マスジド（ジャウンプル、15世紀初期、写真6）、マールワール地方のジャーマ・マスジド



写真2. マンドゥーのジャハーズ・マハル（15世紀後半）  
船の宮殿の名を持ち、大きな池に挟まれる。2層の建築で、上層には形の異なるパヴィリオンが配される。



写真1. アジメールのアライ・ディン・カ・ジョンブラ・モスク（1210年）  
インドで2番目に古いモスクで、ヒンドゥー転用柱で作られた礼拝室の前に分厚いアーチ壁が立つ。ただしアーチは水平材を積み重ねた擬似アーチである。



写真3. ベンガルのアディナ・マスジド（1374-5年）  
巨大な中庭のキブラ側中央に位置するイワーンで、間口9.8メートル奥行19.5メートル。本来はトンネル型の屋根を頂いていた。奥にミフラーブとミンバルが見える。



写真4. デカンのジャーマ・マスジド（グルバルガ、1367年）  
キブラ側に設けられた大ドーム室を下から撮影。直径9.5メートルのドームが8つのアーチによって支えられ、ドームの周囲を24個の小アーチが取り囲んでいる。

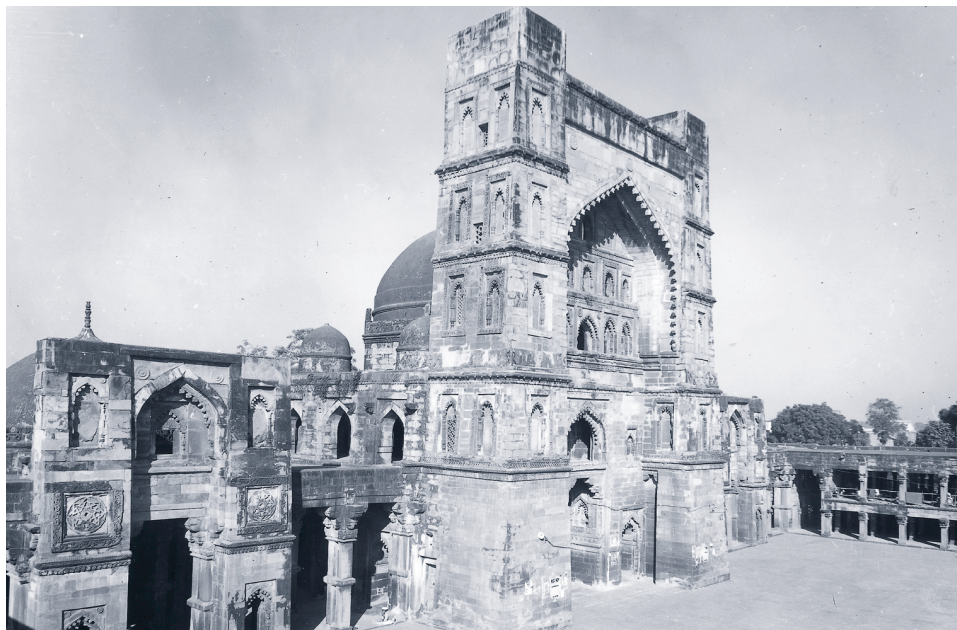


写真6. ガンジス川流域のアタラ・マスジド（ジャウンプル、15世紀初期）  
礼拝室前のアーチが極度に強調される。本来は西アジアのイーワーンを目指した空間と思われるが、ジャウンプル流に解釈されたようだ。



写真7. マルワ地方のジャーマ・マスジド（マンドゥー、1454年）  
入口からキブラ方向を撮影。小ドームと小ドーム9つ分の大ドームから構成され、中庭は等間隔のアーケードによって囲まれる。



写真8. デカンのアシュトゥール墓地（ピーダル、15世紀半ばから16世紀初頭）  
西より撮影。パフマニー朝の9代から18代までのスルターンとその家族の墓建築が並ぶ。



写真5. グジャラートのジャーマ・マスジド（アフマダーバード、1423年）  
分厚いアーチ壁の背後に作られた梁柱式の中央ドーム。柱を3層分積み重ね、直径は5メートルと小振りながら高さ14メートルのドーム空間を創出する。

（マンドゥー、1454年、写真7）があげられよう。

西方から伝来したイスラーム的な要素、たとえばドーム、アーチ、イーワーンなどをどう解釈し、そして土着のヒンドゥー建築技法といかに折衷していったかによって、各地の特色が決定された。面白いことに、上記の時代を画する大モニュメントが、いわゆる転用材モスクから脱却し、その後の地方様式の進路を決定したという点は各地に共通している。単純に概観すれば、梁柱構法に固執したグジャラートを最右翼、アーチ構法に徹したデカンを最左翼とし、ガンジス川流域を右寄り、デリー、ベンガル、マルワを左寄りとして位置づけることができよう。地方毎の研究は進んでいるものの、各地の対比や、なぜこういった地域性が生じたのかという大きな問題は未解決のまま、今後の研究成果がのぞまれる。

最後に、インド・イスラーム建築には墓建築が多いことから、興味深い研究テーマが生ずる。『デリー 第1巻 遺構総目録』に採録された385件の内訳をみれば、モスク61件、墓地72件、墓建築142件、水利施設52件、その他の建造物58件と墓関係の数が最も多い。数多い墓建築のうち、いくつかは奇抜なデザインを有する点に注目したい。墓建築はモスクなどの公共建築と違って、デザイン、立地などに建立者の意図がストレートに表現され

る。したがって、被葬者が判明している墓については、建築を個人や家族と直接結びつけることが可能である。どんな墓を選んで、どこに墓建築をたて、誰がいっしょに葬られたのかなどを謎解きすれば、歴史と建築史をさらに緊密に結び付けることができよう。

さらに王家の墓制もある程度明らかで、各王朝ごとに多様である。デカンに興ったパフマニー朝は、代々の王族が並んで葬られる王家の墓地がグルバルガ郊外に2カ所、ビーダル郊外に1カ所あり、王たちは規模の差こそあれ、そこに似たような墓を並べて建設する(写真8)。ところが、パフマニー朝の後継者のひとつとなったアーディル・シャーヒー朝

は、王ごとにそれぞれ奇抜なデザインの墓を首都ビージャブルの街のあちこちに建立した。それはムガル朝の皇帝たちが、タージ・マハルを筆頭に、墓建築に執着した時期とほぼ同時代の出来事である。街の中に墓がある例としてはアフマダーバードがある。先のアフマダーバードのジャーマ・マスジドをたてたアフマド・シャーは、王宮、大モスク、自分の墓建築、王妃たちの墓建築を街の東西軸線上に整列させた。インドでの東西方向はメッカに向かうキブラ軸と一致する。帝都の都市計画の中に王家の墓建築を盛り込んだという点で特筆すべき事例である。

墓建築については、岩のドームに由来する

という八角形柱廊付墓建築の採用、併置モスクの有無、庭園内の墓廟などさまざまな問題が山積みされている。また『デリー』に採録された、どれもこれも似たように見えるキャノピー・トゥーム(立方体の壁体にドームを載せた墓)も、よくよく見るとそれぞれが異なる細部を持っている。細部の比較によるより細かい編年作業もこれからの課題である。

これらの資料は、建築史研究に役立つばかりでなく、歴史研究の資料としても大いなる可能性を有するのではないだろうか。資料整理が終わり、公開される日には、多くの利用者によってより多角的な研究が深まることを期待する。(センター客員教授)

## 中国美術史におけるデジタル化の現況

### 板倉聖哲

1990年代に急速に普及したインターネットによって情報収集の方法は多様化し、中国学のあり方もプライオリティーの構築法が変わることで確実に変容しつつある。台湾中央研究院、中華電子仏典協会、京都大学人文科学研究所・麥谷邦夫氏の道気社、本学のSATなど、様々な古典籍の電子テキスト化が進められ、公開されている。こうした情報共有の拡大は中国学関連の諸学問に大きな影響を与えると同時に、漢字という文字の持つ特殊性を明確に浮き彫りにし、又、オリジナルの持つより多くの情報の質量をも改めて自覚させることとなった。WWW上のWebページは今後も日々変わっていき、情報量はさらに飛躍的に増大し続けるであろう。

中国学関連サイトの紹介も最近では盛んになり、例えば、漢字文献情報処理研究会編『電脳中国学』(好文出版 1998年)、二階堂善弘・千田大介・池田巧編『コンピュータで中国語 Win & Mac』(大修館書店 1999年)などでも容易に参照できる。又、美術史では、島本澁・岸文和編『絵画のメディア学 アトリエからのメッセージ』(昭和堂 1998年)

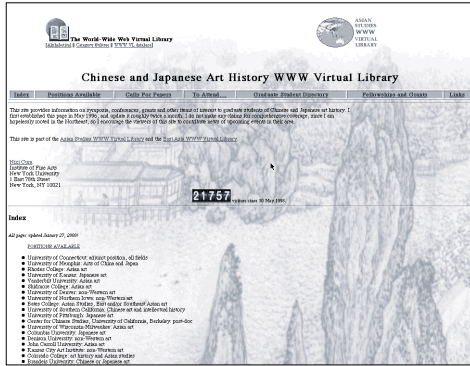
などによって情報がある程度入手できる。しかし、筆者が専攻する中国絵画史、ひいては中国芸術学をめぐるには余り触れられていないのが現状である。ここで紹介する中国芸術学関連サイトは自分の目に入ったもののみで、この小文はいわばブックマークの覚書に過ぎないが、そうした中にも現在の画像公開の状況が窺え、これからの方向性も垣間見られよう。

#### 1.

今や世界中の美術館がホームページを開設し、展覧会等の最新情報の入手は非常に容易になったことは言うまでもない。Yahoo! や goo、Alta Vistaなどの検索エンジンの他、国際博物館会議 ICOMの Museums around the World (<http://archive.comlab.ox.ac.uk/other/museums/world.html>)、World Wide Arts Resources (<http://wwar.com/museums.html>)、中国大陸・台湾の美術館には中国芸術網路画廊 (<http://209.235.102.9/chi8199/>)、アジア美術という広がりの中では AsiArt (<http://www.asiart.com/cgi-bin/links/pages/>)、日本では神戸市立

博物館の塚原晃氏による Info@museum ([http://member.nifty.ne.jp/atsuka/ush/ush\\_ue4.html](http://member.nifty.ne.jp/atsuka/ush/ush_ue4.html)) などがあり、容易に辿り着ける。さらに、Newsletter East Asian Art and Archeology (<http://www.umich.edu/hartspc/NEAAA/issue62/62NEAAA.html>) はドイツ・ハイデルベルク大学編集の同名雑誌のデジタル版。Nixi Cura 女史による Chinese Art com. ([http://www.chinese-art.com/index\\_nonflash.htm](http://www.chinese-art.com/index_nonflash.htm)) は中国の伝統・現代美術に関する最新情報が多く、気が利いている。

中国芸術学関連サイトを利用するための起点となるサイトとしては、ニューヨーク大学中国・日本美術史情報 (<http://www.nyu.edu/gsas/dept/fineart/html/chinese/index.html>) 図 ) がある。これは Asian Studies WWW Virtual Library (<http://coombs.anu.edu.au/WWWVL-AsianStudies.html>) や The China WWW Virtual Library (<http://sun.sino.uni-heidelberg.de/igcs/>) の一部に当たる。この他、コロンビア大学東アジア学関連リソース集 (<http://www.columbia.edu/cu/ealac/eadepts.html>)、アジア・ソサイエターの Asia source (



図

asiasource.org/arts/hp\_ac\_01.cfm) などがある。又、徐清郎氏による「芸術史と芸術批評」(<http://www.imd.tmjcc.edu.tw/arthistory/body.htm>) は中国語圏の研究者から見て東西の芸術学関連サイトを網羅しており、興味深い。日本では、信州大学人文学部・宇佐美文理氏のサイト(<http://monade.shinshu-u.ac.jp/indexj.html>) の情報はリンク集・文献目録など大変充実している。文献情報としては、東京国立文化財研究所のサイト(<http://www.tobunken.go.jp/>) に日本東洋古美術文献目録があり、最近の日本における中国絵画史研究の動向が窺える。

## 2.

美術館・博物館のサイトでは所蔵品を中心に画像の公開も盛んに行われている。その中で中国絵画の画像は多いとは決して言えない。これらも展覧会情報と同様の検索によってコレクションの内容に至ればよい。ここでは特に詳細画像を公開している美術館のHPを挙げておこう。

台北故宮博物院 (<http://www.npm.gov.tw/>) ではコレクションの名品の画像が丁寧な説明付きで閲覧できる。又、ミシガン大学美術館 ([http://www.si.umich.edu:80/Art\\_History/demoea/htdocs/\\_browser/\\_Nationality/\\_Asian/](http://www.si.umich.edu:80/Art_History/demoea/htdocs/_browser/_Nationality/_Asian/)) ミネアポリス美術館 (<http://www.artsMIA.org/permanent/index.html>) など、中国絵画は数点に過ぎないが、詳細画像を見ることができる。

最近では特別展の図録をCD-ROMで出版する例も多く見られ、過去の特別展の内容をインターネットで画像公開しているものがある。中でも、ボストン美術館で1997年に開催されたTales from the Land of Dragons: 1,000 Years of Chinese Painting展 (<http://www.boston.com/mfa/chinese/exhibit.htm>) では、ボストン



図

美術館の宋元画コレクションの代表作がほとんど閲覧できる。又、グッゲンハイム美術館で1998年に開催された China 5,000 Years: Innovation and Transformation in the Arts 展 ([http://www.guggenheim.org/exhibitions/past\\_exhibitions/index.html](http://www.guggenheim.org/exhibitions/past_exhibitions/index.html)) は中国大陸に所蔵される作品の画像が多数閲覧できる。

## 3.

中国絵画を含む画像データベースの公開としては、日本でも注目すべき動向が認められる。国立博物館三館はコレクションの画像データベースを公開している。東京国立博物館HPのカラーフィルム検索 (<http://www.tnm.go.jp/doc/Srch/s00.html>) では2万6千枚にのぼる画像が検索可能である。京都国立博物館HPの収蔵品カタログ (<http://www.kyohaku.go.jp/olc/menu00j.htm> 図) では1万枚以上の画像が詳細な書誌データを伴って閲覧できる。奈良国立博物館HPの所蔵写真検索システム (<http://www.narahaku.go.jp:8000/2kensaku.html>) でもやはり1万枚程度という。私立の美術館では、根津美術館 (<http://www.nezumuse.or.jp/syuzou/index.html>) などが収蔵品データベースを公開している。

又、文化庁では、国立博物館・美術館の収蔵作品や国指定文化財について、計画的にデジタル化と情報公開を進める「文化財情報システム・美術情報システム」を構築中で、さらにそのシステムを拡充して、国立館の収蔵品や国指定文化財に限らず、各公私立博物館・美術館がインターネットで公開している文化財や美術品の情報を容易に検索できる「共通索引システム」(<http://www.tnm.go.jp/bnca/sys/Index.html>) で結ぼうと呼びかけられている。

さらに、京都国立博物館では所蔵品のみならず寄託品の詳細画像を公開している。公開に当たっては作品の所有者との明確な意志疎通を必要とするものであり、それを各年更新する形をとって実現させているという。

## 4.

中国美術関連の画像データベースでは画像石のものが現在最も有効に活用できる。中国学最大のデータベースとして夙に著名な台湾中央研究院の資料庫では、歴史語言研究所の文物圖像研究室資料庫 (<http://saturn.ihp.sinica.edu.tw/wenwu/ww.htm>) は漢画文献目録データベース・武氏祠画像データベース・安丘董家庄漢墓画像などの閲覧が可能である。又、京都大学人文科学研究所東洋学文献センター (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>) でも、所蔵画像石拓本の画像データベースを今年度(1999年度)公開する予定であると聞く。

本研究所では20万点に及ぶ中国絵画写真アーカイブをデジタル・アーカイブに移行させようというプロジェクトが現在進行中である。まず今年度完結する『中国絵画総合図録』正編・続編の書誌データを基礎にして「中国絵画所在情報データベース(仮称)」を制作している。これによって、中国大陸の所蔵機関・個人及び台北故宮博物院を除く世界中の全ての地域に存する中国絵画の所在情報がデータベース化され、ネット上で公開されることになる。今年(2000年)に試験版の公開を予定している。

こうした画像情報の新しい流通の形は、美術史学の変容と呼応して、作品の所有者や我々研究者の画像情報に対する意識をも変えつつある。研究者にとって作品それ自体の持つ重要性は同様であるが、意識の変化、特にアウトプットの形態の変化に応じて、調査の目的をより明確化し、記録媒体をはじめとして調査・記録・保存方法を変える必要も生じよう。コンピュータは我々と作品との間の距離を一方で縮めながらも、他方で遠ざけもする。その中でどういう形で作品に接していくのか、21世紀に何をどういう形で持っていくのか、そうした問いと模索は始まったばかりである。(センター・造形資料科学分野助教)

# センター便り

## 漢籍整理長期研修

センターの前身である東洋学文献センターでは、1980年度から漢籍整理長期研修を実施してきた。本センターはこの事業を引き継ぎ、今後も実施していく計画である。本年度は6月28日から10月8日にかけて実施し、9名が受講した。研修受講者は図書館の司書で、受講後それぞれの所属図書館で漢籍の整理にあたり、研修の成果を活用している。講師としては、東洋文化研究所のスタッフに加えて、所外の11名の専門家にご協力いただいた。また内閣文庫と東洋文庫には見学の便宜をはかっていただいた。この場をかりて厚くお礼申し上げたい。

## 第35回全国文献・情報センター長会議

センターは、東京大学法学部附属外国法文献センター、一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター、神戸大学経済経営研究所附属経営分析文献センター、京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センターと共に、全国文献・情報センター長会議（5センター長会議）の構成員となっている。本年度は当番機関として、第35回全国文献・情報センター長会議を主催した。会議は、文部省学術国際局学術情報課から太田慎一課長、澤田公和専門員、出崎幸彦主任、古謝久美子事務官、研究機関課から徳田次男係長を来賓として迎え、1月28日（金）午後2時から5時20分まで、東京大学山上会館で開催された。会議では5センターの現状と将来について真剣で率直な討議が行われた。本号に原センター長が「第35回全国文献・情報センター長会議を終えて」という文章を寄せている。参照されたい。

## 全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナー

全国文献・情報センター長会議は95年度から、各センターが収集した資料情報を広く研究者に提供するために「全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナー」（5センター共催セミナー）を開催してきた。このセミナーは今年度は「人文社会科学情報の現段階」をテーマとして、12月13日から15日の3日間京都大学人文科学研究所で開催された。本センターからは板倉聖哲助教授が「東京大学東洋文化研究所中国絵画デジタル・アーカイブの現状と展望」について、鈴木隆泰助手が「インド語・チベット語の処理とデータの互換性」について報告した。また東洋文化研究所の原田至郎助手が「クメール語のコンピュータ処理」について報告した。

## アジア・デジタル展示館

アジア学における多様な情報の蓄積・発信を目指す東洋学研究情報センターは、収集した情報のネット上での公開を事業の柱の一つとしている。研究情報センターのホームページ上で公開されているこの展示館では、東洋文化研究所が開所以来収集してきた様々な形の資料を画像で公開するものである。所蔵される資料は文献資料・写真資料が中心であるが、漢籍善本のほかに甲骨片、瓦当、西域壁画断片なども含まれている。これらオリジナルの資料は東京大学内外の特別展への出陳などで一般公開をしており、世に知られた貴重なものでもある。又、文献資料も漢籍善本などそれ自体価値のあるものも多く、これらを画像で公開することによって飛躍的に情報量は増大しよう。テキストが電子化によって支持体から解放されようとしている現代、その支持体の形質自体が研究上大きな意味を持つ。つまり、資料の画像公開は公開される書誌データベースを補う役割も果たすことになる。

当研究所が所蔵するアジア学資料の持つ **かたち** と **いろ** を是非ご覧いただきたい。

東洋学研究情報センター運営委員会委員  
(1999年度)

### 所外委員

落合 卓四郎 附属図書館長、大学院数理科学研究科・理学部教授  
Ch'en, Paul Heng-Chao 大学院法学政治学研究所・法学部教授  
池田 知久 大学院人文社会系研究所・文学部教授  
泉田 洋一 大学院農学生命科学研究科・農学部教授  
中兼 和津次 大学院経済学研究所・経済学部教授  
黒住 眞 大学院総合文化研究所・教養学部教授  
田嶋 俊雄 社会科学研究所教授  
小林 宏一 社会情報研究所教授  
鶴田 啓 史料編さん所助教授

### 所内委員

田中 明彦 教授 汎アジア部門  
平勢 隆郎 教授 東アジア研究部門(第一)  
丘山 新 教授 東アジア研究部門(第二)  
小川 裕充 教授 東アジア研究部門(第二) 委員長  
永ノ尾信悟 教授 南アジア研究部門  
後藤 明 教授 西アジア研究部門  
鎌田 繁 教授 西アジア研究部門  
中里 成章 教授 センター造形分野  
宮脇 博史 教授 センター文献分野  
板倉 聖哲 助教授 センター造形分野

### センター長

原 洋之介 教授、研究所長

### センターのスタッフ

原 洋之介 (はら ようのすけ) センター長・東洋文化研究所長。東南アジア経済。

中里 成章 (なかざと なりあき) センター主任・造形資料学分野教授。南アジア近現代史。

宮脇 博史 (みやじま ひろし) 比較文献資料学分野教授。朝鮮近代史。

板倉 聖哲 (いたくら まさあき) 造形資料学分野助教授。東洋絵画史。

鈴木 隆泰 (すずき たかやす) 比較文献資料学分野助手。仏教学。

深見奈緒子 (ふかみ なおこ) 客員教授。イスラム建築史。

佐々木郁子 (ささき いくこ) 業務掛長。

芳賀 満子 (はが みつこ) 事務官。

新居 弥生 (にい やよい) 事務官。

## 明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター報 第3号

発行日 2000年3月25日

編集・発行 東京大学東洋文化研究所  
附属東洋学研究情報センター  
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-5841-5839(直通)

FAX 03-5841-5898

ホームページ

<http://www.info.ioc.u-tokyo.ac.jp>